

(3) 総合 2版

(第三種郵便物認可)

時標

「若尾さん、残念ながら間違いない乳がんです」。8月の暑い日、後に主治医となるドクターから告げられたこの瞬間から、わたしと「がん」との付き合いが始まった。勉強し準備してからの、がんになつたわけではない。告知は当時のわたしにとって死の宣告

に近いものがあつた。この日のことで覚えているのは主治医と長時間話したこと、乳房の再建を担当してくれる形成外科のドクターと長時間話したこと、会計でお金を払ったことの3場面。だが内容はほとんど覚えていない。そして次の場面は家のソ

ファアに座っていて、外は暗くなっていたことだ。当然、告知の内容や乳房再建を含む術式の名称など全くわからなかった。ただただ恐ろしさでいっぱいだった。

「あれ、わたし、死につながらするような病気なのに、詳しいことが全くわかってない」。正確な判断材料がないまま不安だけが勝手に膨らむ。その後の診察でも、理解の早い良い患者を装いたくて主治医に詳しい説明を求めることができず、情報の海に溺れながら手術を迎えた。手術をすれば終わり、と思っていたことが間違っているなんて思いもしなかった。

記録を通じ、がんと向き合う



若尾 直子
がんフォーラム山梨理事長

と手をつなぎ、真ん中には患者が望む目標、つまり「治療」などが置かれ、チーム全体で目標に向かって医療という協働作業を行うこと。それが本来のチーム医療、だと思う。患者は自分に行われている医療の中身を理解し、参画しなければ自分自身が納得でき

つたらあれほど混乱することはない。今、「チーム医療」という概念が普通に言われるようになった。よくあるイメージとしては、手をつなぐ医療者の輪の中で患者が笑って立っている。でもそれは違う。患者もチームの一員として医療者

わかお・なおこさん 1954年身延町(旧中富町)生まれ。金沢大薬学部卒。薬剤師。NPO法人がんフォーラム山梨理事長のほか、がん患者の団体「山梨まんまくらぶ」の代表も務める。